

知立 弘法さんかわら版

発行編集部

八月です。今年の夏も酷暑です。くれぐれもご自愛ください。

二〇二二年から「尾張名古屋・歴史街道を行く―社寺城郭・幕末史―」をお送りしていますが、今年は名古屋城下町を起点に広がる脇街道についてお伝えします。今月は下街道沿いの史跡、志段味古墳群と味美古墳群です。

★志段味古墳群と味美古墳群

犬山界隈から南の熱田にかけての一带に散在する古墳群を訪ねてみましょう。

下街道の経路に当たる春日井、守山は、早くから人々が住み始めた地域です。

春日井の縄文遺跡である篠木遺跡では約五千年前に土器が作られていた痕跡が残っています。紀元前後には庄内川沿いで米作りも始まります。二世紀頃には銅鐸が使われており、その後春日井の味美一带に多くの古墳を造られるようになります。中でも六世紀初の二子山古墳は大規模な前方後円墳です。



律令制の下で春日部郡、春日部荘が誕生し、条里制の集落と荘園ができました。近隣には社寺が建立されます。古代には内々神社が誕生し、七二二年に円福寺が創建されました。一二六四年に地蔵寺、一三二八年に密蔵院、一四八六年に泰岳寺と、この地域の古刹が創建されていきます。下街道沿いには複数の古墳群があります。四世紀後半築造と推定される白鳥塚古墳は守山にある志段味古墳群のひとつです。前方後円墳頂上部の葦石に白色珪石が使われていたことから白鳥塚と呼ばれるようになり、尾張名所図会には「白鳥山」と記されています。

★味美古墳群と味鏡古墳群

志段味古墳群の西には春日井の味美古墳群があります。尾張有数の規模を誇る二子山古墳をはじめ、白山神社古墳、御旅所古墳、春日山古墳など十数基からなる古墳群です。その南、味鏡神社周辺にも味鏡古墳群があります。周辺は「百塚」と呼ばれるほど古墳が多かった一帯です。

味鏡古墳群では、前方後円墳が白山藪古墳、味鏡大塚古墳、味鏡長塚古墳の三つ。円墳が岩屋堂古墳、伊勢山古墳です。また、その他に無名塚を含めた二十四基の塚が古墳とされています。

われものです。大規模な古墳群の存在は被葬者と大和王権の結びつきを示します。六世紀初頭の二十六代継体天皇の即位に尾張氏は大きな役割を果たし、二子山古墳は継体天皇陵と伝わる今城塚古墳と二分の一の相似形をなしています。

犬山の東之宮古墳、青塚古墳群、その南の志段味古墳群、味美古墳群、味鏡古墳群と連なります。さらに南下すると名古屋東部古墳群を経て熱田古墳群に至ります。

この南北の線上は、古代において、木曾川の氾濫原や伊勢湾の海岸線にかからない地域であり、かつ東部丘陵地帯の台地上、あるいは麓にあたり、大和王権とつながる尾張氏が居住し、集落を形成していった地域と考えられます。

★下街道沿いの寺社仏閣

早くから人々が住み、豊かだったこの地域には、社寺が築かれ、織田氏、豊臣氏、徳川氏との由来話も残ります。

内々神社は景行天皇時代創建の古社です。東国平定を終えた日本武尊が内津峠を行軍時に、早馬で駆けつけた従者から副將軍建稲種命が亡くなったとの報告を受けて、「ああ現哉々々(うつつかな)」と嘆き、建稲種命を祀ったのが始まりです。一五七五年に焼失したものの、豊臣秀吉が再建しました。

内津峠を越える道が下街道です。名古屋城下と中山道を結ぶ往還道として賑わい、内津は宿場町でもありました。

一三二八年開創の密蔵院は、十五世紀半ばに最盛期を迎え、塔頭三十

六坊の七堂伽藍、学徒三千人超、末寺は尾張、美濃を中心に十一ヶ国七ヶ寺に及ぶ大寺院でした。天台宗の中心であったため、織田信長が延暦寺と敵対した影響で衰退しますが、江戸時代に住職珍祐が名古屋城三之丸東照宮の別当になったことから再興します。

瑞雲寺は一四二九年創建です。織田信長の父である信秀が寺領を寄進して繁栄しました。一五八四年、小牧長久手の戦いで火災に遭いますが、江戸時代に復興されます。

林昌寺の創建時期は不明ですが、梵鐘は一四八九年に造られたものです。天正年間(一五七三〜八九年)に織田信雄が父信長の大法会を清洲総見院で行った際、熱田にあったこの梵鐘を総見院に納め、後に林昌寺に移されたと伝わります。

一五五二年創建の林昌院には、桶狭間の戦いの際に織田信長が戦勝祈願を命じました。一六六三年、尾張藩祖義直が奉安した秋葉権現を祀るようになります。

麟慶寺は一五九六年の開山です。当初は三台寺と称し、後に慶林庵となり、一七二六年に麟慶寺に改称しました。麟慶寺は木曾御嶽山を開いた覚明行者の菩提寺です。

覚明行者は一七一八年、春日井の生まれです。春日井を通過する下街道は木曾御嶽山にも通じることから、この地域では江戸時代に御嶽講が広がりました。玉野御嶽神社をはじめ、御嶽神社が複数あります。

★水野街道と定光寺

来月は水野街道と定光寺についてお伝えします。乞ご期待。



知立 耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

kouhei@oh-kouhei.org



皆さん、こんにちは。八月です。猛暑が続いています。熱射病などに気を付けて、くれぐれもご自愛ください。かわら版では日常会話の中に含まれている仏教用語を紹介しています。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということですね。

毎年酷暑は厳しさを増しています。天候だけは誰にも平等に及びます。大変ですね。と言った使った「平等」という言葉も仏教から生まれた言葉です。お釈迦様の生きた時代のインドにはカーストという身分制度がありました。バラモン（宗教者）クシャトリア（王貴族）、ヴァイシヤ（商工者）、シュードラ（奴隷）という四階級からなり、バラモン、クシャトリアはほぼ同列。ヴァイシヤ以下は身分が低く、身分の違う者同士が話をしたり、恋愛や結婚はありえない話でした。しかし、クシャトリアのお釈迦様は身分を意識することなく、ヴァイシヤにもシュードラとも親しく付き合いました。お釈迦様は、身分や善悪を分けるのは人間の分別心によるものであり、そういう分別

心が欲や執着や善悪や悩みや苦しみの根源であると諭しました。分別心がなければ平等心が生まれ、欲や執着から解放され、善も悪もなく、悩みや苦しみを生まないと諭しました。

かなり前のことですが、以下は実話です。聴覚に障がいのある若者が某大学を受験しました。その受験生は英語のヒアリングテストにおいて障がい配慮した形で受けられなかったかと大学に相談しました。しかし、大学は「全ての学生が平等な条件で受験することが前提です」と告げ、失望したその若者は結局受験を諦めました。

この出来事はやがて社会問題化し、以後、障がいに対して「合理的な配慮」が求められるようになりました。障がい等に対応して合理的に調整することが平等であり、単純平等は平等ではないという社会的な認識が浸透していききました。人権とも関係するこうした「平等」概念は現代になって誕生したように思われがちですが、今から千二百年前、最澄さんは「法華去惑」の中に次のような言葉を遺されています。曰く「およそ差別（しゃべ

つ）なきの平等は仏法に順ぜず。悪平等のゆえに。平等なきの差別も仏法に順ぜず。悪差別のゆえなり」

最澄さんの文章に登場する「差別」は現代用語の「差別」ではなく、「区別」や「違い」と言った意味です。「様々な違いや差異を認めない平等は仏様の教えではなく、間違っただけの平等である」という文意かと思えます。仏教用語から誕生した本来の「平等」は、人々の差異を無視した単純平等ではないようです。

雨は全ての草木に平等に降り注ぎます。大きな草木は多くの雨水を受け、小さな草木は少ない雨水を受けます。もし、草木の大小に関係なく全ての草木に同量の雨水が降り注ぐことになれば、大きい草木に適量の時は小さい草木は水浸しになり、小さい草木は適量の時は大きい草木は水不足となります。

降り注ぐ雨量が異なっても、仏教用語的な意味で「平等」に降り注ぐ雨は、全ての草木を育み、薬草や材木など、それぞれの草木なりの役割を果たします。ではまた来月。

※

耕平

お知らせ

今年、令和7年1月から、「手配り」は縮小しました。

「山門」にかかわら版を入れた台を置きますので、ご自由にお取ください。

ご協力、よろしくお願いいたします。

かわら版編集部：
大塚耕平事務所 TEL 052 757 1955



※ 次回の「弘法さん」縁日は令和7年9月12日（金）です。